

新緑の三溪園で北欧茶会



上：徳川家康が伏見城内に建てた月華殿。その後三室戸寺に移され、原三溪が1918年に移築した。
下：米山明子さんが北欧をイメージして北欧陶磁器で組んだオーロラ茶箱。利休ゆかりの国宝茶室、待庵の古材を使った茶箱も趣がある。

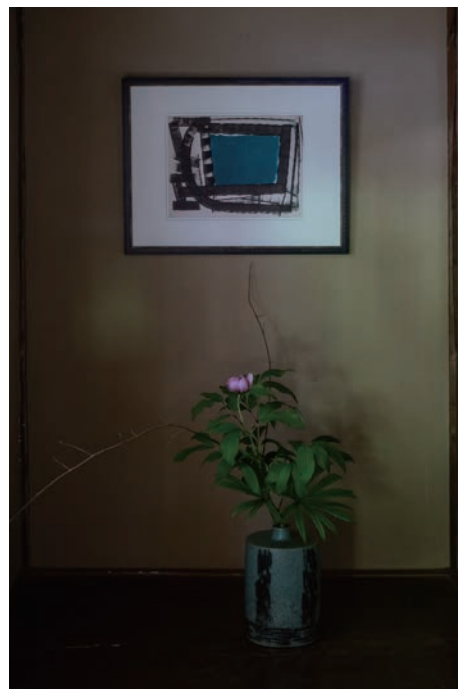


道具拜見では初めて見る北欧の陶磁器に興味津々のご様子



ゴールデンウィーク真っ最中の5月3日、横浜の三溪園で北欧茶会が催された。園内で開催中のスウェーデン・ビエンナーレ展、「Contemporary Art from Sweden part 3 ―アートの庭―」の関連行事として行われたもので、北欧作家の陶芸作品を茶器に見立てるといって、東洋と西洋がコラボレーションしたお茶会。伏見城の遺構という重要文化財の「月華殿」をお茶席として、新型インフルエンザ等まん延防止等重点措置の施行中ということもあり、各席を15名だけにとどめたが、4回の茶席はすべて予約で満席になるほどの人気を集めた。

1950年代の北欧では、急速な工業化に対抗するように手工芸の良が見直され、陶芸の世界においても古くからの憧れでもあった東洋の古陶磁を模範とする作品が作られるようになった。ヴェルヘルム・コーゲやベルント・フリーベリらは日本や中国の形や釉薬を研究し、そこに北欧らしいデザインを加味した作品を生み出して高い評価を得た。本来は花器やポウルとして作られたものだが、ルーサイトギャラリーの米山明子さんが、ちょうどよい大きさのものを集めて茶器として提案、今回のユニークなお茶会となった。参加者はあふれるような新緑を眺めながら、北欧の器でお茶をいただくという、またとない機会を得て、誰もが笑顔で帰られたのが印象に残った。



右：原三溪が建てた茶室・金毛窟ではジャン・ディローの版画にデンマーク・サクサボー窯エバ・スタインールセン作の花入
左：月華殿の床は生井巖の筒画 デンマーク ケーラー窯の花入